答辞

寒さがようやくやわらぎ始め、春の訪れを感じる季節となりました。川之江高校のシンボルである橘の木。花言葉は、『追憶』。追憶とは、過ぎ去ったことに思いを馳せること、偲ぶこと。そんな今日という日に似合う橘を背に私達は、卒業します。

私が実家から少し離れた川之江高校を選んだ理由。それは、走高跳で花を咲かせたい。その思い一つでした。川之江高校でなら、きっと実現できる。そう誓った川之江高校での 3 年間はまさに山あり谷あり、どんな瞬間も、つい昨日のことのように感じられます。

3 年前の 4 月 8 日。慣れない制服に袖を通し、履き慣れず今にも靴擦れしそうな革靴で迎えた入学式は、期待よりも不安の方が大きかったかもしれません。そこに中学の頃の見慣れた顔ぶれはなく、周りでは既に友達が出来ている子がいる中、たった一歩を踏み出す事もできず、明日からの高校生活に焦燥感を募らせるばかりだった。私の 3 年間はこんなマイナスからのスタートでした。

一カ月が経った頃、大洲での集団宿泊研修が行われました。地図を手に道に迷いながらもゴールを目指したウォークラリー。心を落ち着かせ精神の統一に励んだ座禅。転覆しながらも無我夢中で漕ぎ続けたカヌー。童心にかえって全力で過ごしたこの 2 日間は、中々高校生活に馴染めずにいた私にとって光が差した出来事となりました。

先輩と対戦し白熱した三学年合同のクラスマッチ。初めての文化祭に胸を高鳴らせながら準備したクラスでの出し物。夏祭りや迷路、男女逆転の駄菓子喫茶では友達の仮装した姿に笑いが止まりませんでした。一つ一つ行事を重ねるごとに私達の絆は目に見えて深まっていきました。

私たちの高校生活は、賑やかで華やかなものばかりではありませんでした。

2 年前の冬、一瞬にして日常が消え去りました。未知のウイルスによって、私たちの青春が、目標が、希望が奪われてしまったようだった。部活動の中止、休校、緊急事態宣言、延長、また延長。休校解除の後に待っていたものは、変わり果てた日常だった。マスクのない生活は考えられず、黙食を強いられたお弁当の時間。そして畳みかけるように様々な行事が縮小・中止を余儀なくされました。北海道班・関東班・台湾班に分かれての待ちに待った修学旅行。楽しみにしていた高校での修学旅行。しかし、それが開催されることはありませんでした。こんなはずじゃなかった。何度もこのウイルスを恨んだ。異常なこの事態に不安は募るばかりでした。

そんな予期せぬ高校生活だったからこそ、三年間の集大成とも言える最後の体育祭にかける想いは大きく、「成功させたい」その一心でした。準備の時間は例年の半分以下と制限され、応援合戦では、なかなか振付が決まらず、その上、衣装作りも同時進行で進めなければならない、全員の動きが一つになったのは本番間近でした。細部にまで想いを込めたアーチ制作では、締め切り直前まで絵の具まみれになって描き続けました。炎天下であっても後ろを向く人は一人としておらず、ひたむきに前を向いて走り続けたあの姿は今でも目に焼き付いています。黄道団の睨みを利かす狐、赤光団の烈火を身にまとう大蛇、青嵐団の雷雲で牙をむく龍。力強く描かれたアーチを背に 4 分間の渾身の応援が会場を震わせました。勝ちにこだわっていたはずが、いつの間にか、勝利以上の何かもっと素晴らしいものを手にしていました。確実に一人一人にスポットライトがあたっていた。201 人の汗と涙と努力が一つの大きな結晶となり私達を照らしていました。

私が川之江高校に入学した理由の一つ。部活動での思い出は格別なものでした。陸上競技部に走高跳の選手として入部した私は、お世辞にも強い選手とは言えなかった。しかし私は四国大会出場という大きすぎる目標を立てた。15 ㎝自己ベストを更新しなければ厳しい状況であった。なかなか成績が伸びない中で、顧問の先生の「力はついとる。自信もって跳んで来い。」その一言に何度も助けられました。プライベートを返上して付きっきりで指導してくださり、数え切れないほど手を尽くしてくださいました。さらに、チームメイトの存在は計り知れないほど偉大なものでした。たった 1 ㎝,0.01 秒の世界で戦い過去の自分に勝つために努力し続ける姿に何度も背中を押されました。中でもあるチームメイトとの出会いは私を人間的にも成長させてくれました。彼女は些細な相談も自分のことのように一緒になって考え、悲惨な結果に悔しくて泣いていた私の側で黙って背中をさすってくれました。その存在は私の憧れでした。そんな仲間たちに囲まれ、負けていられないと、朝練習を欠かさず、課題克服のため隙間時間を活用し、私なりに最大限の努力をしました。迎えた最後の県大会。この高さを成功すれば四国大会出場が確定されるという場面。勢いよく走り出し踏み切った直後、体がバーに触れスタンドの支えの上で大きく二回弾んだ。バーは落ちなかった。その瞬間、私の夢が叶った。私はこの仲間に囲まれたからこそ夢を実現することが出来たのです。

目標を達成できた瞬間もあれば、あと一歩、届かなかった瞬間もある。嬉し涙も悔し涙も皆と一緒に流したこの日々が今ではとても、愛おしく感じます。

在校生の皆さん。私達は少し頼りないこともあったかもしれません。それでも最後まで支え続けてくれてありがとう。世代交代の時がやってきました。3 年間は本当にあっという間です。今ある環境が明日もあるとは限りません。一日一日を大事に悔いの残らないよう過ごしてください。川之江高校は古き良き伝統があり、地域の方々からも愛されている高校です。伝統を守りつつ、新しいことにも沢山挑戦し、たった一つの母校を大切に想い、より良い物へしていってください。

先生方。今まで沢山の迷惑をおかけしたと思います。そんな私達に最後の最後まで寄り添ってくださったこと心から感謝しています。夜遅くまで面接練習をしてくれたり、学校行事にも一緒になって参加したり、教室に観葉植物を置き好きな動物の話をして私達に癒しをくれました。そして何よりコロナ禍という過酷な状況の中でも、諦めることなく様々な行事の計画を立ててくださったのは、先生方です。私達の安全を守りながら進路実現のために最大限の時間を費やしてくれたことは、決して忘れません。充実した高校生活を送ることが出来たのは、紛れもなく先生方のお陰です。本当にありがとうございました。

18 年間私達を一番近くで支え続けてくれた家族。父さん。私の大会や勝負事がある度にご先祖様に願掛けしたり、四国大会出場が決まった時には夢の舞台でも良い跳躍が出来ますようにと、大きな応援旗を作って待っていてくれてありがとう。母さん。3 年間毎日、朝早くに起きて野菜や煮物、栄養満点で愛情たっぷりのお弁当を持たせてくれてありがとう。末期の病でちょうど 1 年前、天国に旅立ってしまったばあちゃん。まだどこかにいるんじゃないかと思ってしまうことがあります。ばあちゃんにできなかった分、看護師になるという次の夢を叶えて沢山の人の命に寄り添う看護師になります。

卒業生の皆さん。私達はこの川之江高校で出会い、辛い時にも笑いあって、同じ時を過ごしてきました。皆とこんな有意義な高校生活を送ることが出来て私は本当に幸せ者です。しかし別れを告げる時となりました。毎朝、着慣れた制服に袖を通すことも、眠い目をこすりながら通った通学路も、教室で「おはよう」と挨拶を交わすことも、真剣に学びながらも冗談に大笑いした授業も、休み時間に他愛のない話で盛り上がったことも、放課後全力疾走で部室へと階段を駆け下り、運動場や体育館、校舎内から様々な掛け声が聞こえてくることも、明日からは日常ではなく、思い出となってしまいます。その思い出を糧に私たちはまた、階段を上り始めます。簡単に登れるものもあれば、苦しくて一人では登れないものもあります。でも確実に上へ上へと足を進めています。それぞれがそれぞれの道で花を咲かせられることを願っています。

皆、3 年間本当にありがとう。さようなら。

令和四年三月一日
卒業生代表　三寶天音